



瀬田の丘裏庭版

主任司祭から瀬田の兄弟姉妹へ

主任司祭 小西広志 神父



創刊 2022 年

編集協力・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部 東京都世田谷区瀬田 4-16-1

カトリック歳時記



聖母月 その起源

毎年五月を教会は伝統的に聖母の月（聖母月）と呼んできました。信徒がそろって聖堂でロザリオを唱える、各家庭を訪問し合って家庭集会を催し、そこでロザリオの祈りをする。聖母像を先頭に行列をする。など、五月の教会は聖母マリアさまにまつわるいろいろな行事があったものです。また、春の陽気に誘われるかのようにして、聖母に関連する場所（巡礼所）などに皆でそろって詣でることなども世界の各地ではおこなわれるのも五月です。「五月の信心」と呼ばれるこれらの教会の美しい伝統は、いつも聖母マリアさまへの祈りに彩られています。

聖母月の美しく、民衆の愛に満ちた習慣がどこから始まったかは諸説あるようです。しかし、長い

年月を重ねながら、人々に親しまれ、実行されていきました。十二世紀の文人、アルフォンソ十世は今のスペインにあったレオン・カステイリヤ王国の王でした。文才に恵まれ学問の造詣が深かった彼は叙情詩「聖母賛歌」を残しています。その中に次のようにマリアさまを讃える一節があります。「数々のバラの中のバラ、花々の中の花、女性たちの中の女性、ただ一人の女主人、諸聖人と天の光」。

ちょうどこの頃にロザリオの祈りも生まれ、普及していきました。聖ドミニコに異端と闘うための道具として聖母がくださったのがロザリオの環だったという教会の伝承があります。十三世紀の中頃、マリアへの崇敬が高まり、マリア像をバラの冠で飾る習慣が「ロザリウム（バラの園）」と呼ばれるようになりました。そして、繰り

返し「アヴェ・マリア」の祈りを唱える祈りと相まって「ロザリオ」と呼ばれるようになりました。ドミニコ会士らによって広められていったこの祈りの習慣は、イタリア中で唱えられるようになりました。マリアさまの美しさと、イタリア全土で花咲き匂うバラの香りと美しさとが重ねられ聖母月の習慣が少しずつ生まれていったのかもしれません。

ところで、五月に聖母マリアさまに祈りをささげるのを具体的に



に提案したのは十七世紀に活躍し、「ローマの使徒」と呼ばれた聖フィリッポ・ネリでした。彼はマドンナ（聖母）の絵の周りを花で飾るようにと若者たちに指示しました。そしてその前で歌と祈りをささげ、マリアの名のもとに善行に励むようにと教えました。また十七世紀後半には五月の月全体をマリアへの祈りで過ごすことを実行し始めた信徒団体がフィレンツェ近郊に生まれていきました。このあたりから、五月を聖母月として祝う民衆の信心が生じていったようです。

時代は前後しますが、古代から五月には春の訪れを祝う習慣がローマ人にも、ゲルマン人にもありました。中世では春には、特に十字架への信心が熱心におこなわれていました。「五月祭」とも呼べるこうした祭りを背景に聖母月は次第に生まれていったのでしよう。

マリアの崇敬のために五月全体を通して祈り続ける民衆の信心

が盛んになったのは十八世紀のイタリヤにおいてでした。十九世紀に入り、教会の教導職は「聖母月」を認めます（ピウス七世、一八一五年）。これは皇帝ナポレオン一世によって幽閉の身となった教皇が、ナポレオン失脚後、ローマに無事に帰還することができた史実とも関連するようです。また十九世紀中頃の無原罪の御宿りの教義宣言（一八五四年）が聖母月の実施を促したとも言われています。こうして、十九世紀の終わりには、ヨーロッパ全体と新しい宣教地であるアジア・アフリカにこの習慣が広まっていきました。日本に再宣教するためにやってきたフオルカード神父もまた、琉球王国の那覇に上陸したのも五月でした（一八四四年）。

近年になって、教皇パウルス六世は回勅「メンセ・マイオ」を発表し（一九六五年）、五月に聖母マリアに祈りをささげるのは教会の尊い伝統としています。

新しいミサの式次第について

はじめに

本年十一月二十七日より、ミサの式次第が変わります。ここでは数回にわたって変更箇所の解説をします。もとよりわたしは典礼の専門家ではありませんので、新しい式文に批判を加えることはできません。むしろ、新しい式文を実施する中で大切な点を皆さまと分かちあいたいと思います。

今月はミサ式次第の改訂作業の経緯について説明し、ミサの中の『開祭』の部分解説します。

改訂作業の経緯

一九六三年、第二バチカン公会議で『典礼憲章』が發布され、各地で典礼刷新が行われました。これは突然起こったものではなく、さかのぼること百年ほど前から典礼についての様々な試みがなされてきたのです（典礼運動）。その集大成が『典礼憲章』となります。

典礼改革の原則は大きく分けて以下の四つです。

- ① キリストの過越秘義に結び合わせる。
- ② それ故、典礼上の本質を尊重する（古代教会の典礼が規範）。
- ③ そして、会衆の積極的かつ行動的な典礼への参加。
- ④ 参加を促進するための自国語での典礼行為。

ここでは一つひとつを吟味することはしませんが、簡単に言えば、



古代教会で行われていたミサを現代社会で行う、とまとめられるでしょう。古代の教会は主の食卓を囲むようなミサを行っていましたし、ラテン語、ギリシア語、アルメニア語などそれぞれの文化に根づいたことばを用いていました。そして何よりも、イエスさまの受難と死、復活という過越の秘義を再現し、そこに司式者も会衆も結ばれるような典礼の姿でした。

さて、一九六三年以降、典礼改

革は実行されていきましたが、最初にラテン語による規範版を作成、公布し、それに基づいて各国語版が出来上がりました。その際、教皇庁典礼秘跡省からの認証を受ける手続きが必要となりました。典礼刷新は一九七〇年に發布された『ローマ・ミサ典礼書』初版から始まりましたが、第二版は一九七五年、第三版は二〇〇二年に改訂がされています。

日本のカトリック教会では一九七五年の第二版を基準と



して日本語版『ミサ典礼書』が一九七八年にできあがりました。そして暫定的に典礼秘跡省が認証を受けています。ですので、日本語のミサ式文は、そのできあがった時からより精度の高いものへと改訂する必要があつたのです。

ところで、先に書きましたよう

に『ローマ・ミサ典礼書』ラテン語規範版は二〇〇〇年に第三版に改訂されていますので、日本の教会でも第三版にあわせた形での新しい翻訳をする必要が生まれてい

きました。そこで、今回の日本語のミサ式文の変更は、『ローマ・ミサ典礼書』ラテン語規範版第三版に基づくものとなります。なぜ二〇〇〇年にラテン語規範版を変更をしなければならなかったかについて説明する必要があります。

しかし、これは冗長となりますので省きます。

それでは早速、新しいミサ式次第を見てみましょう。今回は開祭の部分です。

「またあなたとともに」

変更箇所

司式者…「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに」

会衆…「また司祭とともに」

となっていますが、

新しい式文では

司式者…「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに」

会衆…「またあなたとともに」

となります。

解説

これは、ミサのなかでの「主は皆さんとともに」という招きのことばでも同じように「またあなたとともに」となります。ラテン語規範版では「またあなたの霊とともに」となっています。このまま日本語になると霊肉・三元論と取られ兼ねないので、今回は「あな

た」となりました。

「兄弟姉妹」

変更箇所

会衆…「全能の神と兄弟の皆さんに告白します……」

と現行ではなっていますが、それが

会衆…「全能の神と、兄弟姉妹の皆さんに告白します。わたしは、思い、ことば、行い、怠りによってたびたび罪を犯しました。聖母マリア、すべての天使と聖人、そして兄弟姉妹の皆さん、……」

と、「兄弟の皆さん」が「兄弟姉妹の皆さん」と変わります。

解説

ここでの「兄弟」はキリストにおける「兄弟姉妹」の意味です。肉親的なつながりを指している訳ではありません。確かに聖書的な意味でも「きょうだい」は肉親の

つながりだけを言いません。人と人の親しいつながり、交わり、一致を表します。しかし、現代語では「兄弟」は肉親のつながり、しかも男性のつながりを表すことばになりました。そこで「兄弟姉妹」と表現することで広がりをもたせました。

キリスト教諸派の伝統はわたしたちの理解を助けてくれるでしょう。自分たちの信仰の仲間を「兄、姉と呼んでいます。教会に集うわたしたち、洗礼を受けたわたしたちはキリストにおける「兄弟姉妹」の関係なのです。そのつながりの中でミサの始まりに罪のゆるしを請うのです。

「いつくしみをわたしに」

変更箇所

先唱…主よ、あわれみたまえ。

会衆…主よ、あわれみたまえ。

先唱…キリスト、あわれみたまえ。

会衆…キリスト、あわれみたまえ。

先唱…主よ、あわれみたまえ。

会衆…主よ、あわれみたまえ。

「あわれみの賛歌」はこのように唱えられています

先唱…主よ、いつくしみを。

会衆…主よ、いつくしみをわたしたちに。

先唱…キリスト、いつくしみを。

会衆…キリスト、いつくしみをわたしたちに。

先唱…主よ、いつくしみを。

会衆…主よ、いつくしみをわたしたちに。

と変更になります。

つまり、「あわれみ」から「いつくしみ」へ、さらには請願の意味合いを強めるために「わたしたちに」を加えています。

解説

「あわれみ」という文語表現から「いつくしみ」という口語表現へと変わりました。厳密に言えば「あわれみ」を簡単に「いつくしみ」へと置き換えることが可能か

どうかは疑問の余地があります。ただ、これまでの式文では明確ではなかった、誰が、誰に向かって「いつくしみ」（「あわれみ」）を願うかがはっきりした点はよいと思います。ミサの始まりにあたって、共同体全体で「いつくしみをわたしたちに」くださいと願うことは美しいことです。そして、ミサが個人のものではなく、共同体のためのものなのだという事実にくきつけとなるでしょう。

なお、注意すべきは、ここでの「主」は「主イエス・キリスト」を指しています。主なる神のことではありません。復活したイエスさまに初代教会が最初に与えた呼び名（称号）が「主」（キリエ）でした。



絵画に寄せて

ジョット・ディ・ボンドローネ
(Giotto di Bondone 1267?-1337)
はイタリアの画家です。ルネサンスの始まりを告げる画家といえるでしょう。彼はアシジの聖フランシスコについてよく描いています。

アシジにある聖フランシスコ大聖堂には彼が描いたと言われている「聖フランシスコの生涯」という一連のフレスコ画があります。しかし、より確かにジョット自身が描いたアシジの聖人として、フィレンツェのサンタ・クロッチェ教会にあるバルディ礼拝堂（あるいはバルディ家礼拝堂）の装飾画があります。聖人の生涯から七つの場面を取り上げ、礼拝堂左壁面から祭壇を囲むように右壁面にかけて描かれています。このページで紹介されているのはそのうちのひとつで「聖フランシスコの死」あるいは「聖フランシスコ

の嘆き」と呼ばれる作品です。

聖人の死に直面し、嘆き悲しむ兄弟たちの姿が描かれています。

鑑賞者は画面左にある横たわっている聖フランシスコに目が奪われるでしょう。そして、次第にその周りで嘆き悲しむ兄弟たちの姿に気づかれます。あるものは死にゆく聖人に語りかけ、あるものはひざまずき、あるものは接吻し、あるものは驚き、あるものは祈っています。ジョットはひとりの人間が死んだときに示す様々な反応をここに集めたようです。画面の右端には一群の兄弟たちが控えています。手には口ウソクのようなものを持っています。おそらく遺体を聖堂に運び出すために準備しているのでしょう。ひとりの貧しい人の死と、その遺体を信心の対象に活用しようとするたくらみ。この相反するものが画面の両端にあるのです。永遠のやすらぎと緊張の対比です。そこに挟まれて、ほんの刹那、弟子たちはちいさな兄弟フランシスコの死を嘆いています。



「聖フランチェスコの死」

ジョット・ディ・ボンドローネ 1325年 サンタクロッチェ教会バルディ家礼拝所

主任司祭からのお知らせ

少しずつ教会に子どもたちが戻^{もど}ってきました。小さな子どもたちがこんなにたくさんいる教会は23区内でも珍^{めづら}しいです。土曜学校にも子どもたちが集^{あつ}まっています。聖アントニオは子どもたちを守り、その保護者たちを悪者の手からかくまいました。世界中のどこでも、聖アントニオの名がつく教会はいつも子どもたちであふれています。わたしたちも教会の小さなメンバーにやさしいまなざしを送り、育^{はぐく}みましょう。

また、こどもたちの泣き声などを聞きながらミサをするのは、主任司祭としてとてもうれしいことです。

ご様子をお知らせください

今年は何人かの教会の兄弟姉妹を天国へと見送りました。寂^{さみ}しい気持ちにさせられます。高齢の方々、病^{えんりょ}気の方々、遠慮^{えんりょ}なさらずにご様子をお知らせください。

アントニオ会館の改修工事

アントニオ会館のリフォーム計画は着々と進んでいます。おそらく7月号にはその全容^{ぜんよう}をお知らせできると考えています。あわせて、聖堂^{かいしゅう}の改修^{ぼきん}の募金も少しずつ集まってきました。皆さまのご協力をお願いします。

身の回りのものにご注意

ミサに与^{さい}っている際などは身の回りのものにご注意ください。

典礼の暦

- 5月15日 復活節第五主日
- 5月22日 復活節第六主日 合同堅信式（11時）
8時半と9時半のミサはありません。
- 5月29日 主の昇天の主日
- 6月5日 聖霊降臨の主日
- 6月12日 三位一体の主日
- 6月13日 聖アントニオの記念日 修道院お祝い日
- 6月19日 キリストの聖体 初聖体
- 6月26日 年間第十三主日
- 7月3日 年間第十四主日
- 7月10日 年間第十五主日

